

「うちゅう」40年

月刊「うちゅう」が創刊されたのは、今から39年前、1984年4月のことでした。当時はまだ、大阪市立電気科学館の時代で、「うちゅう」は「星の友の会」発足とともにその会誌として発刊されました。当初は、表紙以外は白黒印刷でしたが、冊子の大きさは今と同じA5サイズです。今年は「うちゅう」が創刊されてから、40年目にあたります。

1984年といえば時代はまだ昭和の59年、ロサンゼルスオリンピックでカール・ルイスが活躍し、世間ではグリコ・森永事件が話題になった年でした。映画「風の谷のナウシカ」が公開されたのもこの年でした。

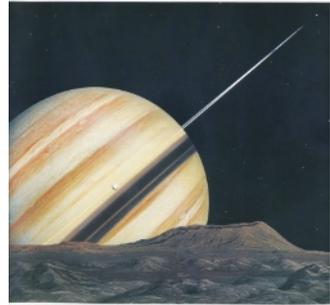
創刊号を見ると、「ハレー彗星はどこから来たか」という記事が掲載されています。この2年後の1986年はハレー彗星が回帰する予定になっていました。

彗星探査機打ち上げの計画も進んでおり、彗星の起源に迫る期待が込められています。

続いて、「空飛ぶ天文台あれこれ」として、本格的な宇宙観測の時代を迎えて、宇宙望遠鏡に関する話題が掲載されています。特に当時活躍していた国際紫外線衛星(IUE)を使って実際に観測を行った時の様子が紹介されています。さらに2年後の1986年には、宇宙から星を観測するスペーステレスコープ(ハッブル宇宙望遠鏡)が打ち上げられることになっており、宇宙望遠鏡に対する期待が述べられています(なお、実際にはハッブル宇宙望遠鏡は1990年4月に打ち上げられました)。

ほかにも、「星はなぜ光るか」という天文学の基本に関する解説記事が、対話形式で掲載されています。これは星空喫茶室という連載記事となっており、その後、「星のスペクトル型」、「星の等級」・・・と題した記事が毎月掲載されて行きます。まだインターネットのない時代ですから、「うちゅう」の記事は、天文学に興味のある皆さんにとって、重要な情報源になっていたと思います。

「うちゅう」は創刊以来40年、歴代の科学館の職員以外にも、大学の先生方や友の会会員の皆さんなど、多くの皆さんの協力で発行を続けてきました。これからも、さらに多くの方に科学への興味を引きたてていけるよう、充実した記事を掲載していきたいと思ひます。



創刊号の表紙

江越 航(科学館学芸員)